

野口 このシンポジウムは、3 人の方に上がっていただきまして、いろいろなお話を通じて、来年に迫った東京 2020 オリンピック・パラリンピックの後に、われわれはどのようにスポーツと接していけばいいのか、あるいはスポーツ界がどのように変わっていくのかというようなことを展望できればいいかなというふうに考えております。

今日、このお三方に集まっていたのは、オリンピック・パラリンピックに、実際に今、現場に入って、試合の選考会とか、そういうのに向かって戦っている人たちというのは、もう多分、目先のことでいっぱいなので、そんなことを考える余裕もない。来年以降どうするのかなんていうような、のんきなことを言ってる場合じゃない状況です。

今日の演者の方々は、その中にどっぷり漬かっているんですけども、ちょっと客観的な目でやってきたことが振り返られるような立場の方々を、選択させていただいたと。

まず、話の順番からですけども、緒方さんのほうからいろいろな話をさせていただいて、その次、小沢先生に渡して、最後に伊佐野先生のほうにパラリンピックのほうの話をしていただくという流れで進めさせていただきます。

野口 まず緒方さん。中学生時代に日本代表に入って、100 メートルから 1500 メートルの自由形、全部の日本記録を持ってたっていう方です。スリータイムズ・オリンピックです。ロサンゼルス、ソウル、バルセロナの 3 大会に出場されて、その後、現役を引退された後に、中京大学で研究生をされて、その後ミズノに入られて。オリンピック等でスターターのホイッスルを鳴らすの、ありますね。緒方さんがホイッスル鳴らさないと、瀬戸大也の金メダルすらないという、そういう立場にいらっしゃいます。挨拶がてら、ホイッスルを鳴らしていただきたいなと思ひまして、今日は試合で使うホイッスルを用意していただきましたので、ぜひ、この笛の音色、この笛が鳴ってからスタート台に選手たちが上がるっていうのを、実感していただきたいと思ひます。お願いしてよろしいですか。

緒方 分かりました。今日、言われたので持ってきましたので、やってみますが、ショートホイッスルって言って、ピッピッピッピッって 4 回ほど鳴らした後に、ロングホイッスルっていうのが鳴るようになってます。そして定刻、スタート台に乗って、全部整ったよって合図をスターターに出すと、スターターが「Take your marks」で、スタートするっていう形になりますんで、その手順でちょっとやってみたいと思ひます。

野口 お願いします。

緒方 合図をスターターに送りますと、スターターが「Take your marks」と言い、スタートしますっていう段取りです。

野口 ありがとうございます。今日、会場がこういう会場なんで、笛の響きっていうのが、

いまいち分からないかと思うんですけども、緒方さんの笛は、どこの国のどの試合会場で鳴らしても、彼の笛だって分かるぐらい、笛の音色が、響きがすごくいいんですね。東京オリンピックも、彼のこの笛で競泳競技がスタートするということになって、非常に重要なポジションにいらっしゃる方です。

緒方さんと小沢先生には、対談形式で少し話を引き出しながらやっていきたいと思いません。

まずは超トップアスリートだった緒方さんが現役を引退されて、競技役員になったきっかけっていうのは、一体何だったのかというところから教えていただきたいと思います。

緒方 きっかけは、私、選手は92年のバルセロナに出て引退したんですけども、その後すぐ、チームマネジメントスタッフとして、代表チームの総務という役割を2004年まで、アテネオリンピックが終わるまで、ずっとチームに帯同して付いて行ってたんです。その2005年のときに、もう今はお亡くなりになりましたけど古橋廣之進先生から、「競技審判がどうしても年寄りが多い」と。こういう言い方は失礼ですけども、当時の審判はご年配の方が多かったので、「君、若いよね」と。当時、私、30前半だったと思います。「これからは若い人が頑張ってもらわなきゃいけないんで、ちょっと頼む」というダイレクトな指示が飛んできて、もちろん古橋さんのご意向ですので、ノーという言葉はなく（場内笑）。

私、なんにもそれまで、審判とかいうことをやったこともなかったんですけども、それがきっかけで2005年の秋から、今でも覚えてますけど、初めて審判をしに、横浜国際プールの神奈川県ジュニアの試合に行っただけです。普段はスタンドから見てる人が、プールサイドに行かなきゃいけないんで、何をしたいのか分からないぐらいのことで、今でも覚えてますけども。それがきっかけで今に至ってる状況です。

野口 初めて国際大会で、競技役員という場に就いたのはいつですか。

緒方 正直言いまして、古橋さんから言われたのは、「審判やったことないけど、そのまま審判やって、国際審判まで全部一気にやってくれ」と。通常は日本の審判からアジアへ行き、アジアから世界に行くんですけども、古橋さんの指示で、「一気に君、世界まで行ってください」ということで、なんであのとき行っていたか、よく分かんないんですけども、一気に行き過ぎたぐらいなんですけど、突然、国際大会も行かされました。

ですから、私の国際大会の審判のデビューは、2005年の11月に西アジア大会っていうのが、当時、カタールのドーハで開催されたんですけど、それにもう一人日本の方と一緒にやっていきなり、さっき笛、吹きましたけど、「審判長をやってくれ」ということを言われて「え？本当にやるのか」というのが内心で、その当時のアジアの水泳連盟を仕切っておられる審判長のボスの方が、「おまえしかないから、ちゃんとやってくれよ」と。あたかも僕が、長年経験をされてるみたいな感じで言われたんですけども、実際、僕は始めてまだ数

カ月っていう状況で、やばいなっていうのが正直な気持ちだったんです。でも、たまたまなんですけども、西アジア大会という西のほうのアジアの大会だったので、日本とかが出ないもんですから、レベルがちょっといつもより低いので、日本で言うジュニア大会ぐらいの感じのレベルだったので、何も問題が起きずに終わったんです。

野口 日本大学ならではのむちゃぶり体制が、そうなったということですけども（場内爆笑）。実際に行って、仕事の中身ですね。今の現在の仕事、審判長って名の付く仕事、どのようなことをプールサイドでされてるんでしょうか。

緒方 私の国際水泳連盟の中での立場というのは、審判員っていうのは世界中に何千人、何万人っていらっしゃるんですけども、その中を代表して、世界で17名ほど選ばれる人がいらっしゃるんです。テクニカルスイミングコミティーっていうんですが、そのメンバーに私はアジアから選出されてまして、アジアから4人ほどいるんですが、そのうちの1人なんです。このコミティーのメンバーは、プールサイドに約35人ぐらい審判が、デッキ上、デッキというのはプールサイド上に、いろいろ各コースの審判とかが就くんですけども、その中にもわれわれは入るんです。主なポジション、さっき言った審判長、スターター、あと泳法審判長、折り返しの責任者、あと見えないところで招集場とか、あと公式計時の所にも1人就いたりとか、いろいろな重要なポジションがございます。そこに大体17名の委員会の主要メンバーを配置していき、運営を円滑にするというのが役割になっています。

ですから、普通の審判とはちょっと違う部分の運営も兼ねながらの、トラブルが起きないように、きちっと審判の仲間を統括しながら業務をするっていうのが私の役目です。これは同じように、アジアにもアジア水泳連盟というのがございまして、また委員会がございまして、またこれは12名ほど委員のメンバーがいます。私はその2番目の副委員長をやっているんですが、アジアでも同じような感じで、アジアの試合では、アジア大会とかアジア選手権とか、そういう大会があると、運営プラス競技審判をきちっとまとめる役というのが、主な仕事になってきます。

野口 ありがとうございます。すごく責任のある重い仕事だなというふうを感じるんですけども、そういったことをしながら、大会運営を通じて、今まででやりがいを感じた瞬間みたいなのはどんなときでしょう。

緒方 正直言うと、審判をやりながら思うことはいっぱいあります。オリンピックは、北京からずっと毎回行ってるんですけども、やりがいというか、一番いいなど。皆さんも多分うらやましがると思うんですけど、一番近い所でレースが見れます。これは、誰よりも一番近い所で目の前で見れます。これはやっててよかったなって、本当に思いながら見えます。ただ、審判というのは公平じゃなきゃいけないということがありまして、僕は日本人だから、

日本のチームのことをみんな最優先に応援したいんですけど、世界の大会とかオリンピックとかだと、皆さんに公平にしなきゃいけないので、その気持ち、表現を殺さなきゃいけないのも、非常に難しいところでもあります。ですから、前回のリオのときなんか、初日から萩野選手が、400メートル個人メドレーで金メダル取りましたけれども、そういうときなんかってというのは、本当にもう、私もジャンプして喜びたいところなんですけど、それを見せちゃいけないのが非常に心苦しいとこっていうか、やっててうれしい半面、うーん、もったいねえと思いつつながら間近で見えます（場内笑）。ただ、本当に一番近い所でリアルタイムで見れるので、これはやっぱり審判冥利に尽きるっていうのは、ずっと思っています。リオのときは金藤（理絵：女子200m平泳ぎ金メダル）選手のときも、目の前で見てましたし、本当に日本の選手が活躍すると…。だから来年のオリンピックでこんなふうになると、私どうなっちゃうのかなって思いながら、ちょっと心配してるんですが。審判をやっているときはクールな顔して…最近、ラグビーで笑わないっていう話（注：日本代表の稲垣啓太選手の話）もありますけど、私も笑っちゃいけないと思って、ニコニコしたいんですけど、クールな顔をして仕事してますんで、ぜひ見てください（場内笑）。

野口 そんな苦しみがあるうとは、外から見ると分からないもんですね。次に、これまで一番印象に残ったことがあったら、教えていただきたいと思います。

緒方 やはり一番残ってるのは、オリンピックのシーンです。たまたまですけど、北京オリンピックのときは北島（康介）選手のときに、僕、2回とも審判長で当たってまして。だから一番目の前で、ゴールするときは本当の真横からタッチする瞬間を見てるんですけども、もう本当、祈る気持ちで、早く着けと。「北島、早く着け」と心の中で叫びながら見てましたけども、そのときに二つとも優勝してくれたんで、本当うれしかったです。さっきも言ったように、喜ばないんで申し訳ないんですけども。でも、周りの審判はみんな、僕が日本の審判だって知ってるから、握手を求めてきて喜んでくれるんです。でも僕は意外とクールにしてたんですよ。

北京オリンピックのときは、自分のレース、審判長。要は自分が審判長をしてるっていうのは、責任が全部、私に乗っかってきますんで、やはり北島選手がその中できちっと優勝を果たしてくれたっていうのは、非常に印象に残ってて。しかも世界記録で泳いでたっていうのもありますんで、もうダブルですよ。一番いい金メダルで世界記録、一番最高の勝ち方なんで、これがやっぱり一番印象に残ってます。

野口 他の国の審判たちから見たら、あいつはなんで笑わないんだって言われてるかもしれない、そんなような瞬間だったのかなというのは、本当に我々でもまず味わえないようなお話ですね。

オリンピックが来年東京で行われる一方で、今、国際水泳連盟（FINA）では、すごく大会

のPRというかを沢山やっていて、ものすごい数の国際大会になってきたわけじゃないですか。ちょうど今年もワールドカップっていうのが8月にあったんですけども、競技運営そのものが1個のパッケージになってる感じで、その中にいて、どうお感じになりますか。

緒方 私とか野口先生が選手をやっていた頃というのは、こんないっぱい試合はなかった時代なんですよ。ですけど今は、もう毎年のように、世界大会やら主要な大会が次々とやってくるようになってきます。小沢さんもそういうのの面倒を見ておられるから、余計、分かんと思うんですけども、選手も体力的にはきついでしょ。けど多分、選手もだんだん慣れてきたのかなど。そういうスケジューリングに。われわれが今の時代にいたら、僕はちょっと頑張れないなっていうような、すごい、ある意味タイトなスケジュールで、ずっと年間、試合が続いていってるんです。

でも、やはり水泳競技は、かなり人気が出てきたのも裏付けされてまして、選手たちが定期的に頑張って、水泳自体を盛り上げてもらおうと。特に日本の選手は、みんなモチベーションが高い。なぜならば来年、日本であると。何がなんでも自分が出たいという気持ちが、皆さん強く思われてるんで、そういう意味でみんな負けん気を出して、お互いが切磋琢磨しながら。水泳は来年の4月がオリンピックの最終選考会になるけども、そこを目指して、自分が絶対（代表選手に）なるという意欲がものすごく強いので、ありとあらゆる大会が来ても、みんな頑張りますよね。だから、これは素晴らしいことだと思って。ジュニアのスイマーとかは見習ってほしいなと思いつつながら、見てるんです。そういうところが水泳の強さかなと思いつつながら、（故障とか）心配しながら見てます。

野口 いざとなったときは、小沢先生がいるんで大丈夫だと思うんですけど（場内笑）。例えば、確かに大会の数が増えた。大会そのものを興行として、安定した運営の仕方というか、世界各国で開くっていう意味で、ものすごく競技役員の人たちにも、こういうところを注意してやってくれとか、こういうふうにやってくれみたいなことっていうのはあるんでしょうか。

緒方 審判には、基本はそういう注文はほとんどないです。要は、試合が円滑にスムーズに、トラブルなく進むように進めてほしいと。よくいわれるアスリートファーストですよ。アスリートが最高のパフォーマンスを出せるように準備して、その通りに消化してほしいという指示しかございません。

野口 ありがとうございます。そしたら次ですけども、東京オリンピック、恐らく緒方さんの感情がいろいろ揺さぶられるような、すごいレースがたくさん見れることだろうというふうに考えておりますが、それが終わってから、どのように関わっていきたいのかというふうなところ。なんか展望みたいなものがありましたら、教えていただきたいです。

緒方 私はオリンピック終わったら、ゆっくり休みたいですけども。というのは、水泳は実は、オリンピックは来年来ますけども、2021 年は実は福岡に世界水泳が来るんです。また日本で開催なので、オリンピックの水泳版を福岡でまたやらなきゃいけない。要は、そのために、またわれわれ審判も全部行って、お手伝いしなきゃいけないということで、あんまり気が休まる暇はないというか…。21 年が終わるまでは、もう来年と同じような感じできっとスケジューリングが…。夏の7月に（世界選手権が）開催だと思うんですが、7月なので暑い真夏で、みんなから応援してもらえるように、その準備を滞りなくやらなきゃいけないと思ってます。その後は、少し国際大会とかそういうのは、休憩させていただければありがたいかなって思ってますけど、これは私個人の願望です。どうなるかは分かりませんが（本人笑）。

野口 確かに大会の数が増えて、東京でも毎月のように日本何とか選手権だとか、再来週東京都 OPEN があったりとか、いろいろと新設大会もあったりするから、ちょっと休みたいというのが正直なところなんですね。

緒方 選手は出る試合をチョイスできるんですけど、審判はある試合、全部に行かなきゃいけない。だから休みは実はないですよ。そういう意味合いで、「私、ちょっと休みたい」と言っただけです。選手と同じように、ちょっと選ばせていただければと。

野口 いえ。本音のところでは良かったんじゃないかなと思います。ここに載ってない話なんですけども、東京が終わって、今度、福岡で世界選手権があつてと、だんだん年を重ねていくと、次の世代の競技役員を育てるっていうような役割も出てこようかと思ってますけども、その辺について何かお考えはありますか。

緒方 そうなんです。実はいいことを聞いていただきました。ありがとうございます。若い人の審判が、さっき僕がなった理由に「年配の方が多かった」ということだったんですけども、いまだにご年配の方が多くて、若い20代、30代、40代の審判っていうのが少ないです。実を言うと、先週もその打ち合わせをして、今後、世界に向けて出す審判のリストを作ってたんですけども、若い人が実はいなくて、困ったね…という話になってました。ですから今後、21年以降には、若い人たちにうまく審判に入ってきてもらうようになって、その人たちが世界に向けてどんどん活躍していけるような場、プラスご年配の方も時間もいっぱいあると思いますので、一緒に頑張っていて、さらなるレベルアップというのを図っていかなきゃいけない。とにかく若い人たちを獲得しなきゃいけないというのが課題になってるのは見えてきています。

野口 ありがとうございます。今日、うちの3年生のゼミ生が3人来てるんですけども、ぜひ将来、やっていただきたいなど。

緒方 大歓迎でございます。

野口 ありがとうございます。そうしましたら、緒方さんのお話はいったんここで閉じさせていただいて、小沢先生のほうにマイクを向けたいと思います。

小沢先生は、文理学部体育学科の卒業生で、2000年のシドニーからずっとオリンピックに行っていました。

小沢 そうです。

野口 それこそ、北島康介、萩野公介、名だたるスイマーが全部、小沢さんの治療技術にほれ込んで、契約していたというような感じでやってるんですけども、まず、今の道に立つきっかけになったことってというのは何でしょう。

小沢 僕がトレーナーを目指そうと思ったきっかけは、高校2年生の冬なんですけれど、今でこそこんな体をしてるんですけど（場内笑）。一応、水泳は3歳からやってまして、長野県で中学までいたんですが、中学3年の全国中学校大会で、100メートルのバタフライで3番に入り、当時、強かった日大の付属の日大豊山の井上敦夫監督（現目黒日大理事長）から体育推薦の話をいただきまして。高校から東京に出てきて、日大豊山で練習をすることになりました。やはり日大豊山高校の水泳部っていうのは、インターハイでも1、2番を争う非常に強い強豪校ですので、監督・コーチも厳しいですし、先輩と後輩の上下関係もある中で、いろいろもみくちゃにされながら一生懸命練習してました。でも中学に出たタイムが全然出なかったんです。高校2年生の冬まで出てない状態で、非常にいい練習ができてはいるはずなのにタイムが出ない。どうして出ないのかということ、すごいいろいろ悩みながら練習してたんですね。

その2年の冬のときに、体育の授業が水泳だったんですけど、全体の心得を持つてる体育の先生がいらっちゃって、その先生に愚痴をこぼした感じで、「全然タイムが出ないんで、調子悪いんですよ」なんて話をしたところ、「じゃあ、ちょっと見てあげるから」って、プールサイドで15分ほど見ていただいたんです。その先生に言わせると、「バタフライという種目柄、ちょっと左右のバランスが悪かったのと、ちょっと背中のゆがみがある分、そこをうまく調整しといたから」っていう話でやってもらって。見ていただいた1週間後に、たまたま草試合で申し込んだレースがあったんですけど、全然、調整せずに出たレースだったんですけど、そのレースで2秒以上のベストが出たんです。その嬉しさが忘れられず…。

自分のように一生懸命練習してても、結果が出ない選手たちっていうのは沢山いると思

うんですよ。なので、この喜びをそういった人たちにも味わわせてあげられるような、こういったトレーナーの道に行こうという決心をそこでしましたし、体格や性格がサラリーマンをできるタイプの間人じゃなかったと思いますので（場内笑）、技術を身に付けて、体力を生かしながらトレーナーをやっていこうというのが、高校2年生の冬でできあがり、目指すようになりました。

野口 今でもベンチプレス 160 キロ上げるそうです。

小沢 もう 160 は上げないですね。120 キロは 8 発上がります（場内驚）。

野口 …というような体力勝負。実際の治療は指圧メインなので、体力勝負的なところもありますか？

小沢 午前中から午後、夜、寝るまでの時間、空いてる時間はオープンにしてありますので、選手がどんどん来ますので、そこはきちんと対応していきます。でも、朝一発目の選手と、夜最後の選手の治療内容がおそろかになっちゃいけない。毎回、来る選手、来る選手、きちんとした手技をもって対応できなきゃいけないので、そこは体力がすごい必要だと思う仕事ではあります。

野口 実際に小沢先生は、今、一応、資格としては鍼灸も持ってるんですよね？

小沢 はい。

野口 ほとんど針は使わないんですよね。

小沢 僕は指と肘でほぐしてくんですけど、僕はこの指は「指針」だと思ってるんです。結局、ツボに対して刺激を入れるのを、針でやるのか、器具でやるのか、指でやるのかっていう部分の違いだけで。「指針」の気持ちで圧を奥まで入れれば、針と同じような効果が出ると思ってますので。

野口 ちょっとこれ、言ってるだけでは分からないかもしれないので、伊佐野先生、ちょっと上着を脱いでもらって、真ん中のほうに椅子を置いていただいて、こんな感じですよっていうのを実際に伊佐野先生に味わっていただきましょうか（場内笑）。

小沢 ハールドが高くなりますね。

野口 右側の首や肩、ちょこちょこっとその場でやってみてもらえますか。

小沢 本来の指圧っていうのは「漸増漸減圧」って言って「圧をゆっくり入れてゆっくり抜く」っていうのが、普通の指圧の手技なんです。水泳の現場でもらえる時間っていうのが、水泳の選手は全身疲れるので、全身を 20 分から 30 分の短い時間でほぐさなきゃいけないので、ゆっくりした動作では全然全身の疲労が取れません。なので、僕の場合は「瞬間的に圧を入れて、瞬間的に抜く」。そこで「手数でほぐしていく」ような感じです。あと、圧の強さですね。ゆっくりやって痛い位置までやると、どうしても（受ける側に）力が入ってしまいますので、瞬間的に圧を入れて、痛い所まで行くんだけど、すぐに圧を抜いて、いわゆる「痛気持ちいい」。「ちょっと痛い」けど「力が入っちゃう」、この紙一重のレベルのところの強さでほぐして、プラス手数で…という感じで対応してます。

野口 普通は、ぎゅーっと押さえるのが指圧っていわれるんですけど、小沢さんの場合はポンプのような感じですね。ポンポンという感じで。痛みが出る所を探し当てて、圧を与える。圧をかけたらずぐ抜くっていうやつですね。このほうが、奥のほうに押した強さが働くっていうような論文を、昔どっかで見たことあるようなないような記憶があるんですけど。

小沢 あと、体力を温存するため、指でずっとやってると、手数は増えるんですけど、かなり体力は消耗するので、肘を使うんです。肘は使い方間違えてしまうと、凶器になってしまうので（場内笑）。きちんと筋繊維を分かりながら、肘の接面積を大きく取りながら、「意識は点で取る」というような使い方をすると、これは非常に自分の武器になってきました。そこにうまく体重を乗せながら、選手の体をしっかりほぐしていくという、自分の体重をうまく使い体力を温存しつつ「1人目」と「10人目」で「同じ結果を出せる」ような手技として肘を使っています。

野口 この肘ですね。伊佐野さん、どうですか？

伊佐野 すごく気持ちいいです。あと、ちゃんと奥まで入ってきます。

野口 ということだそうですが、うらやましいな（場内笑）。

伊佐野 すごい肩が楽になりました、本当に。

野口 この後、調子よくしゃべれそうですか。

伊佐野 多分（場内失笑）。

野口 という感じの治療技術を彼はお持ちであると。さっきすごいキーワードになる話だったのは、1人目と10人目を同じクオリティーで治療しなきゃいけないっていうところですね。特に国際試合とかオリンピックとかになると、送り出して帰ってきて、送り出して帰ってきてがずっと続くわけですよ。どのぐらいの時間なんですか。

小沢 僕、緒方さんと初めてデビュー戦で行ったユニバーシアードのときに、競泳選手が三十何人いて、競泳のトレーナーは1人だったんですが、30分の治療を、大会期間中、数えたら250回やりました（場内驚）。なので、常に誰かしら进行治疗してた状態を、上野先生（上野広治氏・スポーツ科学部教授、当代表監督）が見てくれていまして「こいつ体力あるな」というところを買われ、シドニー五輪から連れていってもらいました。

野口 すごい時間数。でも逆に言うと、そのぐらいの時間ずっとやれば、うまくなるみたいなのもあるんですか。

小沢 僕は、手技が上手くなるのは絶対「数」だと思っているので、沢山の選手を触ったほうが、絶対上手くなると思います。

野口 ありがとうございます。小沢さん自身がこの仕事のやりがいを感じる瞬間っていうのは、一体どんなときでしょう。

小沢 一般の人でもそうなんですけれど、自分の体が調子悪いときに診ていただいて、「他では治してもらえなかったのに、小沢さんの所に来たら楽になった」とか、「体が良くなった」という、そういう一言っていうのは非常にうれしいですし、あとは、自分も選手のとときに辛い思いをした部分を、きちんと選手たちにいい笑顔ができるようなお力添えをできるよう、一生懸命頑張ってる部分もあるので。競泳でも一番速い代表選手たちを診れる環境で頑張ってるっていうのは、非常に嬉しく思ってます。

野口 これまでのオリンピックで印象に残ったこと、幾つかあるんだろうと思いますけども、教えていただければと思います。

小沢 一番印象に残っているのは、2004年のアテネの100メートルの平泳ぎの北島君の金メダルのときですね。ブレンダン・ハンセン選手と一騎打ちになるっていう試合のときに、これもやっぱり嬉しいところなんですけど、裏話を聞くことがあるんです。結果の後に。そのときに北島君が言ったのは「これで勝てる」と思ったが、コース台に乗る前に、もうこれは俺、勝ったなっていうふうなことを言ってたんですね。それは、4コースと5コースで二

人が並んでいるんですが、ホイッスルが鳴った後にコース台に上がるとき、ブレンダン・ハンセン選手は、コース台をぬれないようにタオルを台の下に敷いて、足を拭くんですけど、台の横で足を拭いたのに、逆側のほうからスタート台上がってきたんです。

これはもう「ちょっとあいつ動揺してる」と。緊張してるといったところを、きちんと北島君は見ていて、「これは泳ぐ前から、俺は勝つと思いました」っていうことを言ってましたし、実際、タッチ差でもきちっと勝ってきたっていう。そのレースもすごかったですし、帰ってきてからの、そのエピソードを聞いたときも、これは現場にいないと分からない話ですね。

逆に「なんも言えねえ」とか「超気持ちいい」も、僕は現場では聞けなかったんで、帰ってきてから「そんなこと言ってたんだって」ってみんなが言うから、「いや、そういうのは全然、聞いてないよ」っていう話をして、逆にもっと濃い話を現場で聞けるということが、すごい印象に残ってます。

野口 逆にちょっと悔しかったこととか、そういうのはありますか。

小沢 悔しいことは結構、僕、沢山あるんですが、オリンピックでも世界選手権でも、世界大会になってくると、チームのベストタイム更新率は、非常に下がるんです。特にオリンピックは4年に1度っていう開催期間の中で、ベスト率っていうのが2割行かないと思うんです。「勝つレース」っていうのがオリンピックなんですけど、やはり自己ベストを出して勝つということをさせてあげたいように、僕は一生懸命やってるんですが、力が入っちゃったり、緊張してしまったりっていう部分がある中でのレースをよく見てるんです。その中で「ベストを出せなかった」って言って肩を落として帰ってくる選手たちの方が多いので、そういうところをもっと手助けできたらなっていうふうな思いを、いつもしてます。

野口 普段テレビで見るオリンピックだと、いいほうの印象が強いんですけども、逆にベストが2割に満たない率ってなると、やはり、そういう舞台でベストを出すっていうのは、大変なことなんですね。

小沢 なので、特に2008年の緒方さんが言っていた北京オリンピックの100、200mで優勝した北島君が、それも世界記録で両方とも優勝してるっていうのは、非常にすごいことだと思います。

野口 ありがとうございます。次に、先生は今、日本水泳トレーナー会議のメンバーでもあります。水泳のトレーナー業界では、東京オリンピック、あるいはそれ以降に向けて、どのような取り組みがなされているかっていうのを、紹介できることがあれば教えていただければと思います。

小沢 東京オリンピックではオープンブースを出して、トレーナーを連れてこれない国の選手たちの対応をしようっていう動きをしてたんですが、なかなか（会場の）スペースが取れなかったようで、そういったオープンブースの対応がオリンピックはないんです。でも多分、福岡の世界選手権とか、日本でやる国際大会に対してのオープンブースはやっていますので、そこで日本の技術はいいものを持ってらんだっていうものを、きちんといろんな各国の選手たちに伝えられるような、技術の向上を目指すようにはやっています。だいたい会員数も増えて300人ぐらいいますので、国際大会だけではなく、国内各ブロックに分かれて、各ブロックのいわゆる中学でも高校でも、関東大会とかそういうところでも、オープンブースが開けてケアが受けられるというふうな動きをこれからもしていこうという感じで動いています。

野口 障がい者の全国大会とかでは、割とオープンブースとかは結構されてますね。健常者のほうの試合では、まだそれほどじゃないんですか。

小沢 いや、やっています、結構。あとマスターズの人口も水泳は非常に多いので、マスターズの大会でもやっていますね。

野口 今、マスターズ界でも、トレーナーの啓蒙活動みたいなのが、すごいですね。エコーとかを使って、肩関節をその場で診断したりとかやってる先生もいるぐらいなんですけど。そうやって、より高くなった治療技術を世界に広めていきたいという感じですね。そういえば、ちょっと思い出したんですけども、私も出た世界選手権のときに、ちょうど小沢さんの師匠のトレーナーの方（堀内政亜希氏）がずっと代表トレーナーを担当されて、日本人の指圧って珍しいんですね、外人からすると。ヨーロッパだとオイルマッサージがメインになりますし、中国だと針とかになりますけれども。指で押すっていう技術は、すごく外国のトレーナーからは新鮮に映るらしくて、結構、その先生の周りを囲んで、私たち選手が押されてるのをずっと見て、「何だ、あれは」みたいなことをずっと言い合ってたように覚えています。そういうシーンが、これからいろいろな所で見れるかもしれないということですね。ありがとうございます。そうしましたら最後に、小沢先生自身の今後の目標、あるいは展望を聞かせていただければと思います。

小沢 やっぱり手技の向上というのは天井がないと思ってるので、日々、修行だと思っています。いくらマッサージができる機械が増えたとしても、おおまかなほぐし方はできるかもしれないですけど、ピンポイントできちんと相手の人の痛い所とかにきちんと手が届く、いわゆる「手当て」っていうのはなくなっていくかと思うんです。なので、まだまだ僕も未熟なところもありますので、たくさんの患者さんを良くして、どんどん実力を上げていき

たいと思います。

野口 治療技術をどんどんアップデートしていきたいということですね。ありがとうございました。また後ほど、小沢先生にもお話をいろいろと聞ける場があるかと思いますけれども、いったん演者を交代とさせていただきたいと思います。

伊佐野 私からは、ブラインドサッカーの科学サポートについてお話しさせていただきたいと思います。野口先生からいただいたオーダーが3点あります。①関わった経緯と②取り組んでる内容等、③視覚障がい者のサッカーにどのようなサポートが成り立つかということです。

まず大前提なんですけども、私は JPC（日本パラリンピック協会）の委員等々でもなく、代表のスタッフでもなく、2020の大会に直接的に関わっている業務等、何もございません。ですが、こんな私にオーダーが来たということは、私なりの観点から何か話せることがあると理解しています。

最初に、関わった経緯です。本学にはサッカーを講座として担当されている大嶽（真人教授）先生がいらっしゃいます。大嶽先生の専攻はコーチング、ブラインドサッカーのゲーム分析をメインとして研究されています。2007年に私が体育学科で勤務しているとき、「一緒にブラインドサッカーに行って、サポートしに行こうぜ」と声を掛けていただいたのがきっかけです。私はそのときにブラインドサッカーなんていうものは全く分からなかったので、勉強になるかなと思って、行ってみようと思って行きました。そしてもう1名、研究グループである松戸歯学部にはいらっしゃる橋口（泰一准教授）先生です。橋口先生は、ブラインドサッカーの心理サポートをされておりますので、「一緒に行こう」というふうに言って初めて行ったのがきっかけです。今、大嶽先生と橋口先生と私で研究グループを組んで、さまざまところで研究成果を発表したりしています。断ればいいじゃんっていうふうに思った方もいらっしゃると思うんですが、私はもともと体育科教育学を専攻していて、体育の授業をより良くしたいというふうに考えていたのが根底にあります。ですが、私は体育だけの免許を持っているわけではなくて、高等学校の福祉という教員免許状を持っていたり、学生時代にろう学校で運動指導をしていたりと、比較的、障がい者支援に関する働き掛けには、興味がとてもあり、ブラインドサッカーもそのうちの一つであり、私自身の指導技術の向上につながると判断して、参加させていただきました。

現在パラスポーツのサポートは大きく二つに分かれています。日本スポーツ振興センターのサポートは、メダルターゲット競技と非ターゲット競技に分類され、ブラインドサッカーは後者です。これまでブラインドサッカーはアテネ以降、採用されていますが日本代表はこれまで出場したことがありません。今度の東京大会が、実は初めての出場になります。ターゲット競技になることで施設面等、様々なサポートを受けることができます。

ブラインドサッカー協会には強化部も設置されておりますが、非営利団体ですので、金銭面には上限があります。現在のブラインドサッカー協会の資金獲得は障がい者スポーツ競技団体では特筆した成果を上げており、日本代表にもターゲット競技同等の専門的なスタッフが配置されています。設立当時はですので、選手たちが実施したゲームっていうのが一体どうなっているのかっていうのは、自分たちの力量だけでは、なかなか解決に至らなかった部分が多々ありました。そこで、大嶽先生をはじめ、私たちが協力をして、国内外のゲーム分析結果を協会と共有するというのが、少しずつ始まっていきました。

その1つに実際に国際大会に訪れて、世界のブラインドサッカーを分析する試みがありました。それで、2012年のロンドンパラリンピックであったり、2014年の平昌アジア大会であったり、最近で言うと2018年のマドリード世界選手権まで、全試合撮影をしに行き、それで世界の戦術のトレンドを分析し、日本代表にフィードバックしようということが、試みとして始まりました。マドリードは別の先生に行ってくださいましたが、実際に私もロンドンと平昌に訪れ、国際大会を撮影・分析することを経験させていただきました。

実際に日本代表を国内に呼んで試合する強度と、実際に世界大会をやっている強度だと全然異なるので、ここに日本が出場することの重要性は、日々、研究グループで話をしています。

その他にも、ゲーム分析だけではなくて、試合中の「ガイド」がどのような情報を伝達しているか、どのような情報を伝えて、効果的にゴールに結びつけているのか分析しています。また、日本を代表する選手がプレー中の意識をプレーヤーにインタビューして研究しています。トップ選手だけではなくて、視覚に障がいを持つお子さんたちが参加するブラインドサッカー育成事業の1つである「ブラサカキッズキャンプ」における社会的スキルについて調査して、フィードバックをしています。

特に視覚障がいを持つお子さんの特徴としては、主張が少なかったり、配慮しているところが非常に高かったりと、やはり障がいを持つことによる社会的スキルにも少し課題があるというふうに報告されているので、こういったところで参加している子どもたちが、参加した前と参加した後でどのように変化しているのかについても提示しています。

こういったイベントの費用はブラインドサッカー協会が捻出しますが、私どもの調査費用は研究費から捻出しております。そのため研究費を中心とした研究費を獲得し、運営しております。なので、私たちがこれまでしてきたことは直接的に競技に関わるのではなく、これまで手の届かなかったところに、研究という観点で明らかにし、それらを協会や世間に情報、研究成果という形で世間に開示することです。

このように研究を進めていくと、あることが課題として浮上してきました。視覚に障がいを持つ方々は、自分一人で練習をするということが難しいため、多くの選手が通い慣れた場所で、安心できるスタッフがいて、そこで競技力が向上できて、且つ、いろんな方々が入ってきて、普及にも貢献でき、それに関する情報共有もできる場の必要性です。

私たちが常日頃からいろいろな場所に行き、トレーニングサポートをしますが、1カ所

に安定した場所がなかったり、実施方法についても限定されてしまっている場合があると感じておりました。普段、私たちであれば何気なくできることが、視覚に障がいを持っているってだけで、できないって現実を何とか是正したいという思いがありました。

そこで昨年、ブラインドサッカー協会と大嶽先生をはじめとした研究グループにて、業務提携を結びました。科学研究費および日本大学の総合研究費を元手に、ブラインドサッカー協会が競技力の向上を安心したスタッフの近くで実施可能な環境整備として、ブラインドサッカー協会事務所内にトレーニングエリアを設置しました。また、協会だけではなくてクラブチームとも研究業務提携を結び、当該チームの練習拠点にトレーニングエリアを設け、アスリートが採用しているトレーニングを、ブラインドサッカー選手達ができるよう支援しています。そこに学生サポートを混ぜ込むことで、様々な人たちがブラインドサッカーに携われるような環境構築を目論んでいます。

実際にクラブチームでは唯一、GPS を用いたゲーム中の選手のパフォーマンスを測定し、ゲーム分析とともにフィードバックしています。実際にこれで分かったことは、ブラインドサッカー選手ってというのは走ってるように見えるんですけども、ほとんどの時間をジョギング程度のスピードで移動していることが分かりました。しかも、ジョギング程度なんですけども、心拍数は高い選手もいるので、日常の身体活動にも少し課題が出てくるのかなというところをフィードバックしています。このような取り組みをしていましたら、女子日本代表とも結びつき、現在は GPS による測定データや体組成計測定結果等を記したトレーニングレポートの作成を担当しています。

こうした測定データのフィードバックを、ハイパフォーマンスセンターが提唱する「アスリートライフスタイル」の構築のきっかけになればと考えております。

五つ目に、どのようなサポートが成り立つか。私たちが言えることは、「SDGs (持続可能な開発目標)」の 17 の目標の観点から言うと、視覚に障がいを持っているから何かができないっていうのではなくて、誰もが安心して安全にスポーツに取り組めるような支援だったり、サポートを受けられるような仕組みっていうのを作ることに貢献することがサポートとして成り立つのではないかと考えています。特にブラインドサッカーっていう、近年、注目を集めてるスポーツですので、そのモデルケースとして提示することで、他の障がい者スポーツにつながっていければと考えております。

また、私たちのサポートは、プレイ中の動きを数字にして「可視化」したり、言語化してもらうことで「それは一体何だったのか？」ということを「意味付け」するということであつたと考えております。

また、教員の立場なので学生など多くの人たちに障がい者スポーツに関わってもらうことで、スティグマを軽減していくことも広義でのサポートと考えております。選手達と日常会話をすると、学生を共通した音楽を聴いて、話し、一緒のことで楽しみます。そういったところを、普段から入ってもらって、持ち合わせているスティグマを少しでも軽減したいと考えております。

私は初め、「何もしません」というふうに言ったんですけども、様々なカンファレンスに出席すると、東京大会に臨む方々は、大会の成功に向けて注力されているとよく分かりました。そのため、東京大会後も障がい者スポーツの発展を持続可能にしていくには、私のような所属しない立場の人が、日々の取り組みを継続していくことで持続可能性に貢献できるのではないかと思いました。現場の声がとってもよく聞こえて、目の前のことから少しずつ改善していくと、もしかしたら道がちょっとずつ整備されて、そこにいろんな人たちが賛同してくれるのではないかと考えております。

なので、私たちのテーマはいつも、東京ではなくて東京の後、こういったサポートが少なくなってきたときに、ちゃんと道を残しておかないと、障がい者スポーツに賛同してくれる人が少なくなってしまうよねっていう話をいつもしています。

私には代表等のサポートのお声は全く掛かりませんが、そういったところがよさでもあるのかなと考えております。

以上です。ありがとうございました。

野口 ありがとうございました。最後は、協会の回し者かと思ったぐらいだったんですけども、うまくまとめていただいてありがとうございます。

今の伊佐野先生のお話を聞いて、やっぱりなと思ったのは、パラの競技者って、それこそ緒方さんとかわれわれとかが味わってたような、ジュニアの時代から切磋琢磨してとかっていう生活をしてない人のほうが大半なんですよね。ですからアスリートライフって言われても、最初は多分、へーっ？っていう感じだと思うんですよ。緒方さん、その辺はスリータイムズ・オリンピックとして、アスリートライフってどんなんだったか教えていただけますか。

緒方 私がですか。いや、ほぼ泳いでましたよって言ったら怒られますけど、競泳の場合は1日2回の練習が大体、基本ですんで、朝3時間、午後3時間、その間に学校等があれば学校へ行くっていうのの繰り返しですよ。合宿等へ行くと、練習だけの集中ですね。ていうので良かった時代が、僕らとか野口先生の頃なんですけど、今はさらに、それにプラスアルファ、ドライランド、陸上のトレーニングですよ。かなり複雑で、僕も見ていてよく分からないときがいっぱいあります。なんでこんなことしてんのかな…って。

要は、きめ細かなトレーニングを、いろんな方が就かれてトレーニングされてるのを見るんですけど、僕らの頃にこんなことがあったら、俺、もっと速く泳げたなって思いながら見ているんです。それぐらい水泳練習以外のところでも、選手たちはいかに自分を強くしたい、速くなりたい、パフォーマンスを出したいっていう、向上させるためのトレーニングを、切磋琢磨して日々努力してます。その疲れを、この小沢さんが全部吸い取ってくれるわけですよ（場内笑）。

これが大体1日の流れになっちゃうわけなんですけども、僕らよりも今の人のほうが、練

習時間は長いんじゃないかなと思って、変な心配してますけどね。練習し過ぎじゃないかなって。もうちょっと減らしていいんじゃないのかなって僕は思ったりしますけどね。

野口 今でも私も頭の片隅で覚えてるんですけど、緒方さんと現役時代に話をして、2時間半の2回練習で1万8000泳ぐのと、1時間半の3回練習で1万8000泳ぐのと、どっちがいいみたいな話になって、彼は「3回練習のほうがいい」って言って、私は「2回のほうがいい」という話をしたことがあるんですけども。そういう練習漬けの中でいろいろ競り合ったりとか、それこそ明日の練習があるから早く寝ようみたいな、そういうようなライフスタイルの中にトレーニングやらライバル争いやらって入ってくるのが、普通のアスリートライフなわけですね。でも、小沢さんも一時期、障がい者のアスリートにも携わったりとかしていただいたんですけども、小沢さんのほうから見た障がい者アスリートのアスリートライフスタイル的なものっていうのは、どういうふうに見えました？

小沢 パラの関係のことですね。野口さんとリオのパラリンピックも一緒に行かせていただいたときに、ずっと一緒に木村君（敬一、リオで4つのメダル獲得。東京ガス所属）っていうブラインドの選手の対応をしてたんですけど、彼は1人では移動できませんので、そこに必ず介助者が就き、食事や練習をしたりっていう環境の中で、1人で動けない分、介助者との動きっていうふうになってくると、ちょっとオリンピックの選手たちとの関係とまた違うし、介助してる人との信頼関係ができてる分が必要ですね。また競技の中でタッピング（ターン前やゴール前で、タッピングバーと呼ばれる棒で、選手の身体に触れて壁が近いことを知らせる）をしたりっていう。野口さんはコーチもやり、タッピングもできるっていうような立場で一緒にいらっしやっただので、より密なコーチと選手の関係であったなっていうのは、見てて思いました。

野口 そういったことが、今、伊佐野先生が言ってたような、安心、安全に強化活動を積めるということにつながってくるというような話だろうというふうに思いますけど、伊佐野先生とかは逆に、現地でトップアスリートだったり、あるいはトップアスリートを間近に見てた人たちに対して、聞いてみたいこととかありますか？

伊佐野 今、男子のブラインドサッカーには栄養士が就いたり、心理サポートが就いたり、オリンピック選手並みの、最近はプロ選手なんかも出てきてるんですが、極端なんですよ。サポートを受けられる人と受けられない人っていうのが、極端に分かれているので、オリンピックのほうのトップアスリートの中でも、サポートが手厚い方と、実はぎりぎりの方っていうのがいらっしやるのかなっていうふうに思っていて、そういった方々に対して、どういふふうなサポートや手ほどきがあったのかなっていうのは、少し気になる場所ですね。

野口 小沢先生、その辺、知り得る範囲で。

小沢 代表の中でもメダルに届く選手、3位以内に入ってくるような選手たちは、かなり企業が付いたりとか、スポンサーが付いたりとかをしますので、手厚い環境を整えてもらったりってようなことは、非常にあります。だけど、ぎりぎりのラインで入ってきた選手たち、それでも協会が用意しているトレーナーさんであり、動くときはみんな一緒に動きますので、環境はそんなに変わらないです。ただ、入れなかった子たち、日本選手権には出てこれるんだけど、代表にはなれないって選手たちは、所属ないし学校が手厚いサポートをしているところが多いので、意外に日本選手権に出てくるぐらいの選手たちは、非常にいいサポートが受けられてると思います、環境的には。

野口 ということですが、確かに障がい者スポーツは二極化がすごいなっていうのは感じますね。例えば、今の東京パラリンピックは、今、内定している選手がいるじゃないですか。内定者からサポートが付いてくんです。すごくいやらしい話なんですけども。内定を取った途端、JSCの人が来て、「何かやれることはありますか」と来る感じですよ。なので、そうなってない選手たちにはそれが来ないし、代表選考会が終わって正式に選ばれないと、そういうサポートが受けられないっていうのが現実ですよ。でも実際に大事なものは、選考会までじゃないですか。そこに行かないと、そこでベストパフォーマンスが出せないと、代表に入ってオリンピック、パラリンピックを戦えないので、その辺のジレンマっていうのは確かにあるかもしれないですね。

伊佐野 そういうところ、ご両親が非常に頑張ってやってくるところがありますし、あとはご両親と選手の思っているのを見て、手伝ってあげたいっていうような周りのボランティアの人たちがやっとな動いてくれてるところがありますよね。上と下の差がそこにあると思いますね。

野口 ありがとうございます。そうしましたら、そろそろフロアの皆さまからのご質問等々も受けてみたいと思うんですけども。

水島 今日はありがとうございました。皆さんにお聞きしたいんですが、まず緒方さんのほうから。審判をやって、いきなり国際までっていうふうにお話があったんですけど、まず1点目は、審判資格っていうものがあるのかなのかっていうこと。それに関連して、若い後継者をという、後半にお話があったんですけど、審判をやる場合に、多分ホーム（自身の仕事）も持って、さらに審判業務っていうことなので、普通の仕事してると、国際大会とかは1カ月近く出ることになると思うんですけど、海外での審判はどんな仕事してるのか。あと、日本の審判はどういう仕事してるのか。以上2点について伺えればと思っています。

緒方 まず資格は、日本はもちろんございます。ですから私も、いきなり「やれ」と言われた後に、すぐ「何月何日に研修があるから、それ行け」と言われまして、多分ひと月もたたないうちに研修会場に行って、丸1日ずっとお勉強させていただきまして、一応それで、受ければ皆さん審判になれますよ…という資格なので（場内笑）、その資格をまず最低限取っていただいて。もちろんレベルのランクは分かれてるんですけども、そこはぶっちゃけて言うと、ステップは抜きの話で、いきなりトップのほうに上がっていったってということなんですけど、審判はあります。

FINAでも、今までは各NF（各国競技連盟）、所属の国から推薦があれば、それで自動的になってたんですけども、今、国際的には一応、資格を統一しましょうと。

要はコーチには資格があるんですけども、あとアーティスティックスイミングとかダイビング、飛び込みですね。そっちのほうも資格が実は審判にはあるんです。競泳はそこまで厳密な資格が実はないと。要はあるところとないところが分かれてるので、FINAとしては統一にしましょうという動きが実は始まってまして、来年か再来年、かなりタイトなスケジュールなので、多分ちょっと難しいんじゃないかなとは思いますが、資格が必要になってくる時代が、数年でやってくるということ。

またわれわれも研修…ジャッジクリニックっていうのを、年に1回なのか、数年に何回なのか、受けるような形になるっていうふうに、変わってくるようになってくと思います。

もう一つの質問の大会時の場合ですね。私は今、ミズノ株式会社でたまたま就職させていただいてまして、スポーツの会社なので、スポーツの大会にご理解があるというふうに、勝手に僕は言ってるんですけども（場内笑）。一応、私、水泳連盟や国際大会とかも行く場合は、一応、業務扱いにさせていただいてるというふうになってます。そのような最大限のご理解があるが故に私は行きやすいんですけども、そうじゃない方、例えば日本の場合ですと、教員の方が審判の方は多いですね。教員の方とか、あとはわれわれみたいに民間の会社員の方が多いんですけども、聞いてみると皆さん、有休を取られて行かれると。さっきご質問にあった1カ月っていうのは、水泳の場合はなくて、競泳ですと最長で2週間ぐらいなんです。オリンピックを含めても。ですから皆さん、約2週間の有休を取らなきゃいけないという形になるみたいです。

ですので、直前にあなたはオリンピックに行きますよ…というふうな発表ではないので、実はもう来年の審判の方というのは、もう今、この7月に決めましたので、皆さんに通達が行っています。来年のオリンピックに行かれる方は、自分の持っている有休を、いかに有効に使ってオリンピックに行かれるか。またはオリンピックなので、今回に限って、私と同じように、おまえ、会社を代表して行ってこいって言われる方もおられるのか。ちょっとその辺りは確認はしていませんけども、普段ですと皆さん有休で行かれると。海外の方の職業というのは、まちまちです。お医者さんもいれば弁護士もいるし、普通の民間企業で働いている人もいますし、学校の先生もいらっしゃる。みんな一様に、多分、有休を取って、審判業

務に協力していただいているというのが実情ですね。

野口 そうなると、昨今の働き方改革は、だいぶ審判にはプラスになるということでしょうかね。

緒方 働き方改革で良くなってくればと思ってます。

野口 競泳の場合は国際大会、例えば東京で国際大会をやる場合に、何パーセントぐらいの比率で外国人の競技役員がいて、どのぐらい日本人が必要かみたいな、そういうルールってありましたっけ。

緒方 あります。国際水泳連盟で選ぶのは35人選ぶんですけども、35人プラス、ホスト国が9名入ります。その総数で審判団を組んでやります。ですから来年のオリンピックも、日本の方から8名の審判の方と、1人スターターが入りますんで、9名の方が日本のジャッジが入ります。それ以外は全部、外国の方から来ます。

野口 日本選手権もそうですけど、今は8日間とか7日間の開催になっていて、競技役員をかき集めるのってすごく大変だっというふうに聞いたことがあって。東京は集まるんだけど、例えば今度の世界選手権・福岡とかってなった場合に、それだけの数の役員を確保できるのかという問題があるのかなと思うんですけども、その辺はどうなんでしょうか。

緒方 野口先生、一つクリアにしなきゃいけないのは、競技役員というくくりと、僕らがやってるのは審判のジャッジなんですよね。これは日本独自だと思うんですけど、競技役員の方っていうのは、要は私がやってる審判という業務だけの人もいれば、全く運営も関わる人もいらっしゃるわけですね。ですけど世界の場合は全く区分けしてます。

運営サイドは運営サイドの人、われわれはジャッジ。その35プラス9っていうのはジャッジだけなんです。ですから、僕らの仕事っていうのは試合が始まる1時間ほど前にプールに来て、試合が終わった30分後にはもう帰ると。それ以外のことは何もしないと。それ以外のことは、運営の人たちがいろいろお手伝い等はすると。なので、人員不足とか、手配のどうのこうのっていうのは全くなくて、ジャッジだけで言うと選ばれた人しか来れないんです。行きたいから行きますって言っても駄目なんですよ。ですから世界中から選ばれし約45名ということで、皆さんうらやましがられるので、「頑張ってください」って言うだけで、皆さん一生懸命働いてくれます。

野口 ありがとうございます。そういったところがあるんですね。競技役員と審判の違いがあるっていうところですね。

水島 小沢さんに質問があります。いろんな世界大会に行かれてるかと思うんですけど、他のオリンピック、アジア大会、ユニバーシアードなんかはデレゲーション（JOC 派遣事業）で行くので、向こうでいろいろな競技の方と会うかと思うんですが、他の競技のトレーナーとの交流はありますか？っていうのがまず1点と、あと他の競技の選手を触るっていうか、治療をされたことがありますか。この2点、お願いします。

小沢 他の競技とのトレーナーのつながりっていうのは、実際はあまりないですね。水泳に特化した人たちが集まって、その中でやってるっていう部分はあります。なので、逆に見させていただいたりとかっていう場所がなかなかないのは事実だと思います。プールしか行かないので。他の会場とかに行ける ID とかはもらえませんので。

他の競技に関しては、治療院にも何人来てくれてるんですけど、触らしてもらったときに、その人のどういったスポーツなのかとか、あと動きとかを自分の中で頭で考えながらと、本人の主訴と、もしコーチからどういうふうにしてくれっていうような主訴があったら、そういうものを加味して治療するようにはしています。

僕、いろんな競技の選手を触らせてもらってるんですけど、その中でも競泳の選手の筋肉っていうのは、非常に軟らかくデリケートな筋肉質をしています。ちょっと対応を間違えてしまうと、非常に筋繊維を傷めやすく、もみ返しが強く出てしまうので、逆にデリケートな軟らかい筋肉をしっかりほぐせる技術さえ持てば、他の種目に行っても、他の選手が来ても、対応できる自信は今のところあります。

水島 この質問をしたのは、私は体操競技だったので、肩をとにかく動かすことがすごく大事です。バタフライとかは肩をかなり回さないといけないので、水泳のトレーナーの方が体操選手を触るとしたら、どうなるのかなというのはすごく興味があって。

小沢 僕の指圧っていうのは、硬い筋肉に対して、筋肉を緩めてリセットをするっていう感覚でやるんですけど。あとは体操の選手たちの、つり輪でも宙維持をするときには、ある程度テンションを持つかないといけないっていう部分があると思うので、その抜き具合だと思うんですよね。なので、あまりにも抜き過ぎてしまうと、締めるまでの間隔とか、逆に関節とかがルーズになってしまって、故障を起こしてしまったりっていうこともあると思います。競技特性のある中での対応方法っていうのは、多分、また競泳と体操だと、ちょっと違ってくる部分があると思うんですよね。

水島 ありがとうございます。

野口 確かに競技特性によってっていうのは、小沢さんはよく合宿とかに行くと、ちょい

よい水の中に入って、選手の動き見てますよね。

小沢 自分の目で見て、自分がやってた分、自分ではこういうことをしてたんだけど、速い選手たちはこういうところがうまいから速いんだなっていうものを、自分の目で確認するっていうので、潜って見ている。推進力が水の中での動きになってきますので、そういった動きの中での、この子は上半身が得意なのか、下半身のキックが強いのかっていうのも加味したりとか、あと練習内容を先生から見せてもらって、きょうはプル（上肢のトレーニング）が多かったから、上半身の疲れが多いだろうというような見解とか、あとは本人が来たときに、今日はどこが辛いついてというような話を聞きながら、その選手、コーチ、自分の目で見た感覚と、自分の経験を生かしたものを自分の頭の中でプログラミングして、その短い30分っていう時間の中で、きちんといい状態にリセットしてあげられるっていうことを考えながら、ない筋肉をフルに活用してやっています。

野口 ない筋肉って、脳みその筋肉とか、そういう話か。

小沢 あまり考え過ぎて、湯気が出てきた。

野口 例えばですけど、小沢さんの治療院に体操の一流選手が来ました。当然、体を触れば、何となく状況は分かります。それをどのくらいまで疲労を抜いていいのかとか、軟らかくしていいのかみたいなものというのは、ある程度、競技を見たりとかしてないと、分からない部分があるということですか。

小沢 と思います。ですが、僕の考え方では、多分、体操も水泳もそうなんですけど、やる前にウォーミングアップってしますよね。そのウォーミングアップっていうのが僕は、夜にケアを受けたり、ストレッチをしたり、入浴をして、筋肉をある程度緩めてリセットをした状態で、なおかつそこで睡眠を取った。体が動くような状態になっているのを、練習する前に締めて、練習でいい練習ができるようにするための筋肉を締める段階での必要な部分だと思ってるんですよね。

なので、逆に僕、体操選手がもしケアに来られて、肩が痛いっていうときも、肩の周りをはがっちり緩めて、逆に終わった後にはかなり緩んでいるので、次の日の、もし試合だったら試合なり、練習前のウォーミングアップのときに「必ず筋肉を締めるようなウォーミングアップを入れてください」というアドバイスをして、終わらすようにしています。なので結構、普通にはがっちりリセットするっていう方向でやっています。

野口 いったんリセットさせてから、その競技に合った形でウォーミングアップのほうを工夫してくださいっていうような話ですね。ありがとうございます。

結構、小沢さんの別の引き出しを見た感じがしました。水島先生、ありがとうございます。他に何かご質問はありますか。あと数分ありますので、お一人かお二人ぐらいいけるかなと思うんですけども。こういう機会なので。いきますか。

水島 同業の伊佐野先生へ（場内笑）。伊佐野先生は学科の中でもすごくいろんなフィールドの授業をされているのに、ブラインドのほうもされているんだなと思いながら、聞いててなるほどなと思ったのは、ブラインドの選手自身で、ゲーム分析は確かになかなかできないなど。外から取ったものを、どうやってフィードバックするのかなと思ったんですけど、どういった方法で伝えられてるんですか？

伊佐野 選手1人で動いてるだけではなくて、選手を指示してるガイドの方と、あとセンターガイドと言って、中央にももう一名ガイドがいらっしゃるので、その2名の情報を得て、選手が自分で判断するので、プレーヤー1人だけじゃなくて、あと二人ぐらいサポートが実はいるっていう状況になっているので、私たちが直接、言う場合もあるんですけど、まずはガイドの方々に、「こういった傾向がありますので、もしシュートを打つのであれば、こちら辺から多分、打ってきますよ」と。そういった守備対応をしていただいたほうが、傾向としては対応できるっていうのを、まずガイドの方々に伝えて、実際に選手には具体的に伝えるのと、あと「クロックタイム」っていうのが世界共通であるので、自分の中心が12時だとしたら、1時方向、11時方向、9時方向、3時方向っていう形で方向が分かれるので、「大体、この選手は何時方向からやってきますよ」というふうに言うと、そっちの方からやってくるんですね…っていうのを、ご自身で確認されて対応しています。あと、右利きですよ、左利きですよっていう情報なんかも与えると、大体、この辺りから打ってくるっていうのも把握されて、対応しています。

水島 クロックは知ってるんですけど、健常者のクロックと実際にブラインドの方のクロックで、自分が見ようとしたときに、どれぐらいそのクロックが正しいのか、イメージが全然できなくて。

伊佐野 選手の方々も、実際（クロックの模型のようなもの）触ってるみたいですね。時計の針を触って「これが11時を指してる」というのを、手で確かめてやってる。大体、誤差はないっていうのが見解です。なので、私たちも運動指導で難しいのは、全部言語で伝えられない場合があるので、私なんかはルール違反かもしれないんですけど、「触ってください」と言って、触ってもらってます。こういう動きをしてほしいっていうのを。そうすると、身体を直接接触すると、なるほど、こういう動きをすればいいんですねっていうことを把握していただいて、実際にその方々が自分の動きを実行し、フィードバックをして、ちょっとずつ誤差をなくしていくっていう作業をしています。触覚でまず把握してから、自分の中で

イメージして、動きで再現するっていうのが原則的にあったりします。

野口 例えばブラインドのチームの中でも、最初から全盲の人と、弱視から入っていく人みたいな方はいますよね。どのぐらいの比率なんですか。

伊佐野 先天性の方は、そこまで多くはないんですけども、代表の方でも、ちょっとお名前は言えないんですけど、先天性の方はスタートは2名ぐらいはいらっしやって、そのあとは大体、後天性の方が多いですね。

野口 それによっても、多分、クロックの認識っていうのは、すごく違ってくるんじゃないかなというふうに思います。ありがとうございます。1人でたくさん質問させていただいて、この会場の中で一番得をした水島先生でございます。ということで、まだまだ話を聞きたいところですが、お時間が近づいてまいりました。最後に皆さん、一言ずつ2020年後のスポーツ界の展望のようなものであったり、ご自分の目標であったりでも結構ですけども、最後に爆弾を落としていっていただきたいというふうに思いますが、伊佐野先生から。

伊佐野 本日はありがとうございました。私は発表で申し上げた通り、大きいこういったメガイイベントが終わっても、多くの、どんな方でもスポーツに参加できるような機会というのは続いていく必要があるなと思います。それがオリであったりパラであったりっていうのが大きなきっかけになると、スポーツ業界に携わる人間としては大変うれしいなと思います。また、皆さんもこういった形で広げていただけると、スポーツの価値っていうのが広がっていくんじゃないかなというふうに思っております。

小沢 今日はどうもありがとうございました。今後の展望というか、まず来年の4月に日本選手権がありまして、そこで選手が決まりましてから、トレーナー、ドクターも派遣されるメンバーが決まってくるので、一応、シドニーから5大会行かせてもらってるので、できれば頑張って東京も行かせていただきたいんですが、もう50にもなってきましたし、きちんと後継者ないし自分の分身をどんどん増やしていかなきゃいけない年にもなりました。そういうことも考えながら、今後、技の伝承をしていきたいと思っています。

緒方 今日はありがとうございました。私は来年のオリンピックは、小沢さんと一緒に裏方なのでなかなかアレですけども、よりたくさん日の丸が上がって、君が代が何回も聞けると、どんな疲れも吹き飛ぶと思います。本当、君が代を聞くときはすごく幸せだと思うので、そのチャンスが1回でも多くあればうれしいなと思って。私は裏方なので、日本の選手たちが頑張れるように、そういうサポートをしていきたいなと思います。

その後なんですけども、伊佐野先生がブラインドの話がされたんですけど、私はあんまり

パラのことは今までに考えてもいなかったんです。でも、野口先生もパラの選手をよく見ておられるんですけど、実は、我々の業界では今、エリート選手とパラの選手と一緒に泳ぐ機会がほとんどないです。実は大会も別々なんです、いつもね。

でも、海外では一緒にやってる所もあるので、これは私としては、ぜひ2020以降に、パラとエリートと一緒に大会ができるように、何とか後押しして頑張っていきたいなど。そういうことができる時代にもうなってくると思うので、新しいアクアティクスセンターというのは、そういうふうにパラの方も自由に使えるような施設になってるみたいですので、2020以降にはそういうこともできるような大会運営のほうもサポートしていければいいかなと思いましたので、野口先生、またよろしくお願いします。今日はありがとうございました。

野口 そうしましたら時間がやってまいりました。まだまだ話は尽きないかと思いますが、これでこのシンポジウムは閉じさせていただきたいと思います。まず、貴重なお話をたくさんしていただきました3名の先生方に、改めて拍手を持ってお礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。また、最後までお聞きいただきました皆さんには、大変拙い進行で恐縮ではございますが、ご協力いただいてありがとうございました。これでこのシンポジウムを閉じさせていただきます。ありがとうございました。

(了)